

「ささえ」

2017 年 4 月発行 情報誌 第 59 号

発行 NPO福祉用具ネット事務局

住所: 福岡県田川市伊田 4395 (福岡県立大学内)

TEL/FAX: 0947-42-2286

E-mail npo-fukusiyogunet@sage.ocn.ne.jp

新 URL <http://npofukusiyogu.sakura.ne.jp>

情報誌「ささえ」は年 4 回(1 月・4 月・7 月・10 月)発行しています。

印刷 よしみ工産(株) 北九州市戸畑区天神 1 丁目 13-5

福祉用具はあなたの自立をささえます。

あなたのささえがNPO福祉用具ネットを元気にします。

【商品名】自動排泄処理装置
尿吸引ロボ「ヒューマニー」



夜ぐっすり眠れるから
昼間頑張れる！



【発売元】大和ハウス工業(株)

ヒューマニーの上手な使い方は、本NPOの
ホームページに詳しく掲載しています。

洗髪シャワー



NPO福祉用具ネット開発品第1号

【製造元】

(株)福祉SDグループ

平成 27 年より、充電式も発売開始。【発売元】キヨタ(株)

**NPO福祉用具ネットが関わった
主な開発品**



アルファブラ
ソラ クッション



特定非営利活動法人
NPO福祉用具ネット

「大切な芽を皆さんのやさしさに包まれながら育てていきたい…」

心と心を繋ぐ新しい形 “今” から始まる戦い ③ ～ “ここにいろよ” を実践し続ける意味とは？～

NPO 福祉用具ネット監事 (株)cocotama 代表)

佐々木 寿生

今回 4 回シリーズの第 3 弾となる。今回は心理学というものを通しての気づきや行動などを自分がどう咀嚼し、考えていったかというところを話しながら最後に現時点において私が感じている事、事業の話に到達できればと考えている。

答えのない、答え探しの始まり

心理学を 5 年ほど学んだ時点で、国立大学職員を辞めることとなった。

理由は、当時の会計課長からの引き抜きにあい、古巣である会計課へ 2 年前に異動を命じられたこと。そして、最も大きな理由は妻が私と同じ理由で、病気になることである。

会計課役務調達係長として、物品購入以外の全ての契約を行う中、帰宅時間がほとんど 12 時頃という現状で病気の家族を抱えることとなった私にとっては家族を取るのか、仕事を取るのかという選択を迫られることであり、そして、それに追い打ちをかけるように、来年度は物品も含めた組織へ統合し、その係長になることを告げられていた。

私は辞めることを決意した。もちろん、家族が生活できない事情であれば、辞めることもなく、そこにしがみついていたかもしれないが、当時、家族全員がなにがしかの給与をもらっており、私が抜けたとしても食べることに支障がなかったことも大きな要因である。

そして何より、ここには、私が感じていた「組織とは何なのか?」「組織で働くとは?」「なぜ、同じ組織の中でいがみ合わねばならないのか?」という疑問の答えを見つけないことができない。

しかし恐怖を抱いていたことも事実である。なぜなら 45 歳を過ぎた中年男に再就職先など見つかるほど世間が甘くないことも当然に知っており、なんの後ろ盾も、あてもあるわけでもなく、私は蔑まれ、侮辱されるだろう。

その地獄の中で自分が崩れるのか、それとも何某かの答えに到達できるのか、私はこの答えのない答えを見つけないため、私が持つ 1 つの人生で挑むこととした。

人を知り、組織を知る

私が、なぜ「カウンセリング心理学」を選んだのか、それは、実践的に人と関わらねばならない心理学であり、私が目指すのは机上の空論ではなく、心

理学をどのように利用すれば、人は精神が安定し、少しでも多くの癒しを得ることができるのかを学ぶためである。

心理学とは、生まれて 120 年程度しかない新しい学問であり、その学問体系も確立されているものではない。100 人の心理学者がいれば、100 通りの考え方が存在するのが心理学である。現在、分けられている区分もそれぞれ異なり、どれが正しいということではなく、考え方によって異なっているのが現状である。

例えばビジネス世界でよく使われている「ハーズバーグ」の動機付け論や欲求階層説で有名な「マズロー」などモチベーションを扱う心理学は、社会心理学に属される場合が多い。

また、人の心情を正常な状態へ導くために成立して来たカウンセリング心理学ひとつとっても、理論や技法などを合わせると 400 以上が存在する。有名どころを少し上げると行動療法、ゲシュタルト心理学、精神分析、NLP、認知行動療法、論理療法、交流分析、来談者中心療法など枚挙の暇もないほどである。

カウンセラーは通常、心理学の祖と言われるフロイトの精神分析の概略を学び、日本では一般的となっているカールロジャースの来談者中心療法を基本とし、その上にゲシュタルト、NLP、交流分析や現在欧米で流行っている認知行動療法などを幹として、その枝葉に何を付けるかは、本人の性格や目的によって変わる。つまり、カウンセラーによってアプローチや使う理論が異なるのである。

私の場合は、精神分析、来談者中心療法とエリックバーンが提唱している交流分析を基幹とし、そこにビジネス研修などで必要な、動機付け、欲求階層説、そして、人間関係構築に必ず必要となるコミュニケーション理論を枝葉に組み合わせている。なぜ、それを選んだかなどについては紙面の都合上、省かせて頂く。

ただ、これは単なる学問である。私の場合はこれを組み合わせ、実際に現場で起こっているものを自分自身で実験し、経験として培ったものに知識を統合、研修などに応用し、仕上げているのであり、実際の学問としての心理学からはずれているものも多い。

なぜなら、多くの心理学者がそうであるように、心理学を研究しているにも関わらず、上からの目線であったり、非常に排他的な態度を取るものなど、

学問としての知識は豊富であっても、それを実践で生かし切れていないものが多いことも事実である。

私には学識も才能も無く、心理学を深く理解することなど到底無理である。

ただ、人が生活する上でそんな深い知識が必要なのだろうか？私はそうは思わない。

私にできることは、心理学を浅く広くできるだけ多角的に学び、その表現者となることであり、組織で働く方々に知っておいていただきたいことを表現していくことこそ、私の役目であり、目指すものである。そして、その表現者が人を傷つける言動や行動をとることがあってはならないのである。

だから私が最初に始めた行動は、自分変革である。

もともと私は、性格も感情も激しく、自己顕示欲が強い性格で態度も横柄であったため、敵も多く、あるときはいじめ側の人間であり、あるときはいじめを受ける側でもあった。

もともと全てにおいて秀でた才能など持ち合わせないのに、態度だけはでかいため、仲間外れにされることも多かったように思う。

私は自分が抱える無意識の行動、言動を一つ一つ検証することからはじめ、自分がもつ人を不快にする言動や行動、態度などを全て確認し、それを置き換えるとともに、行動だけではなく、無意識にもつ自分の思考形態の構造の矯正を行うことを自分に課した。

これは、日常の中の習慣の中で行うこととなるので、繰り返し違和感がなくなるまで注意を払いながら検証し、改めた内容を習慣化する。

もちろん、相手の受け取り方次第で不快な言動、行動に変わることも多くある事なので、全てを矯正できるわけではないが、少なくとも、今の私の行動や言動を横柄に感じたり、不快に感じる人は減ってきたように思う。

そして大学を辞めてから、組織を知るためには、組織に何らかの形で関わっていくことが必要であった。どうしたら部外者が企業や組織に入っていけるのか、そして、そこにある内部の不安や悩みを情報として取れるのか。

私にその関わりを持つためのヒントとして授けてくれたのが、当時、不況の煽りを受け、企業が倒産する中で契約が減り、どこかに活路を求めている社会保険労務士法人総合労務さんとの出会いである。

私が、心理カウンセラーの資格だけでは世の中を渡っていくのが難しいことを痛感し、産業カウンセラーの資格を得るために北九州の講座を受講したとき、昼休みに私と同様、いつも一人で昼飯を食べている同年に見える男性が、その代表であった。

私たちは、昼休みという短い時間での交流を重ねるうちに社会保険労務士である事、そして今後、研

修を売っていくため、専門の講師を雇っていることなどについて話が盛り上がり、私の経歴から国立大学法人へのアプローチが可能であり、採用される可能性に気が付き、私も含め研修プログラムの作成、販売を行うこととなった。

そして、彼らの行う研修は教育ではなく、気づきがテーマであることを知った。研修は受講者にとって業務の中で発生した一瞬のイベントでしかない。

殆どの研修が、教育や知識として受講するため、それを終えたものにとって何も残さない。それでは意味がない。研修とは楽しくなければならず、「あ、なるほどそうなのか！」という気付きをその中で一人でも多くの受講者に生み出す。

人は理解するのではなく、腑に落ちることで行動を変容させる。その変容こそが私たちが目指す研修である。と彼は言い切った。

私も多くの研修を受けてきたが、骨休め場でしかなかったものが多く、受講後何も残っておらず、寝る場として位置づけていた経験から、この発言は衝撃的であり、感動もした。そして私の研修スタイルの原点はここにある。

それから5年、私は社会保険労務士にいろいろなビジネス理論を学び、講師としての技術やノウハウを時には厳しい指摘を頂きながら習得し、自分なりのスタイルを確立していくことができたのである。

もちろん、私の目指すものと総合労務さんが目指すものには違いがあるため、ビジネス理論をいろいろ学ぶことは表面的なものとし、知識レベルに留め、代わりに私は心理学を用いた、人間関係に特化したコミュニケーションプログラムや、ストレスを解消するにはどのようにすればいいのかなど、現在のメンタルヘルス研修の基礎となるものなどを深掘し、プログラムの質を高めていくことで貢献したつもりである。

5年後、社会保険労務士と共同での研修は終わりを迎えたが、その実績からいろいろな企業、コンサルから研修話が舞い込み、私が望む様々な組織で、いろいろな場所で研修やカウンセリングを行うことができたのは、私にとっての財産となった。

しかし、研修やカウンセリングを重ねれば重ねるほど、一過性のもものでは組織の中に内在する問題を解決することは難しく、本当の意味での問題解決には至らないもどかしさが、少しずつ自分の中の欲求として高まっていた。そしてそれが、現在、私どもが行う事業の答えとなっていくのである。

次号、私がお約束頂いた最後の掲載であることから、このような事業をなぜ考え出していったかなどについて、語ってみたいと考えている。

今回も最後まで、お読み頂いた読者の方へ感謝し、最後の号までお付き合い頂ければ幸いである。

「がんサバイバーの生活と療養」③

がんと共に生きる

熊本学園大学大学院博士後期課程 高松 美樹

前回と前々回、若き母親であるがんサバイバーのAさん、益田市在住の「がんサロン支援塾」リーダーの納賀良一さんのことを書きました。今回は、最近、新聞報道で取り上げられているがん患者の就労継続に関する諸問題を取り上げたいと思います。

Bさんの事例

Bさん、58歳女性、左胸乳がん、発症後7年経過。現在、無治療。

Bさんは、乳がんで左乳房温存手術を受け、術後、左右非対称となった乳房を見て、自分自身のボディイメージに重大なショックを受けたのでしょうか、Bさん自身は術後の患者しか体験できない心境に陥り、医療側とは術後の思いに大きな隔たりが広がりました。この事例については、ジェンダー視点でも考察したものです。以下は、Bさんの「語り」のなかでも就労に関する箇所を抜粋したいと思います。

（病気と周囲の理解について）

20年近く勤めている職場なのでそこでは人間関係も良好で、関係は既に出来上がっていましたから。それを（がんに罹患したこと）報告しないことには仕事が休めませんでしたし、上司に言って周りに助けてもらわないといけないのですぐに言いました。がんに対して、皆さん理解がありましたので病気のことは言いやすかったです。周りからは「よくそんなに頑張れるね。」と言われました。「病気をそんなに抱えて・・・」と頭につくんですけど。

「頑張ってるね。」と言われるのが、頑張っているのに頑張ってるねと言われるので、それは嬉しいんですけど嬉しくない感じでしたね。落ち込んでいるときに「頑張ってるね。」という言葉が正直言って辛かったですね。周りの方の「頑張ってる。」という声掛けはプラスの気持ちで声掛けしているでしょうけど。本人にとっても1日のうちで浮き沈みがあるんですよ。いい時ばかりだけではなく「どーして病気になったんだろう。」って落ち込むこともあるんですよ。1日のなかでもテンションが落ちたり・・・そういう時は辛いこともありましたね。（がんになり治療をしていることを）事前に周りに話していると、そこから説明しないでいいし、いずれ髪の毛も抜けることだし最初にわかってきていたの、治療も仕事もいろんなことに専念できたと思います。これが言わないでいたらきつかったかもしれないですね。親し

い友人に何でもいいから話して・・・家族や母とか迷惑だったかもしれませんが何でも言っていました。近くにいた友達にもわがままになっていたと思います。その時は・・・。

（職場の環境の変化について）

治療が終わった頃、県内での転勤があり、転勤先では私の病気を知らない人ばかりでした。その職場では人間関係があまり良くなかったです。そこで私は、なぜ病気をした上に職場の人間関係でもこんな痛い目に会わなきゃいけないんだろうという気持ちがありました。職場の辛さを感じると病気が頭をもたげてくるんです。そこでは病気のことは言えなかったの、人間関係の辛さと病気の悩みもあったんですね。その辛さも家族や友達に話すことで、鬱憤を晴らしてきました。

がん対策基本法の改正

最近の新聞報道によりますと、上記の改正法は「患者が安心して暮らせる社会」が目標とされています。事業主の努力義務としてがん患者に配慮するとともに、国や自治体のがん対策に協力するように定めています。国などが患者の雇用や就労に関しても、企業に対して啓発を行うこととしました。

がん対策基本法は2007年4月に施行されました。その趣旨は、どの地域でも同じレベルの治療が受けられることなどを掲げています。それから10年近くが経過して、医療技術の進歩で通院しながらも働く人が増え続けて、仕事と治療の両立が新たな、重大な課題になっています。

がんという病気について

黒木登志夫教授によれば、1980年代はじめ、ヒトのがん細胞からがん遺伝子が分離され、がん遺伝子分離の報告を聞いたとき、多くの研究者たちがショックを隠せなかった、と言います。複雑で一筋縄ではないかと思われていたがんが、がん遺伝子という遺伝子によって引き起こされているというのだ。それは研究者たちの進むべき方向が示されたことと、一方でがん遺伝子は問題を単純化しすぎているのではないかという意見も聞かれるようになったのです。

そうした意見が出はじめた1980年代半ばに、がん抑制遺伝子が発見されました。正常細胞ががんをおさえるような遺伝子をもっていることを示唆するデ

一タは、すでに 1960 年代の終わりから得られていました。正常細胞とがん細胞をセンダイウイルスによって融合させると、がん細胞の性質を失い、正常細胞が勝つというのです。このことは、正常細胞もっている遺伝子の中に、がんを抑える作用があることを示唆しています。しかし、そのような細胞をつかまえるのには、なお時代が早すぎたのです。

がんは克服できるのか。がん克服のお手本は、脳卒中対策に見ることができます。でもそれは、結核について脳卒中に対する特効薬が作られたためではないのです。集団検診、人間ドックなどによる高血圧の予防対策、早期発見、脳外科による積極的な治療など、予防、検診、治療のあらゆる面からの努力が実った結果です。

がんでも予防が大きな効率を上げていることが実証されています。1971 年にニクソンアメリカ大統領は、20 世紀末までにアメリカのがん死亡率を半分に減らすことを目標にがん撲滅戦争を宣言しました。しかし、がんは増え続けたことから、その作戦は変更されました。治療が見るべき成果をあげていないからでしょうか、がん患者は増え続けています。

セルフヘルプの活動

「セルフヘルプ」という用語は、幕末日本から西欧社会をモデルとして仰ぎ、その個々人の生活のしかたに注目した時、「自助」と翻訳されて、自立心に満ちた産業人のイメージが沸々と燃え上がった、そうした風景を有しています。ここでは、英語の読みのままに、「セルフヘルプ」と使います。

「セルフヘルプ」は、がんサバイバーでは「がんサロン」の活動において、その基本としての「集い」が思いおこされます。それでも、期待ほどにはこれは、という「サロン」や「集い」に出会えません。ふとしたきっかけから、関西の「播磨」を訪ねることになりました。そのエッセンスをかいつまんで紹介したく思います。

神戸から公共交通を利用して、ほぼ 1 時間 30 分以上かかり、播磨新宮にある小さな教会にたどり着きました。ここには、「がんカフェ」が開かれてがんサバイバーが気楽に、立ち寄れる場を提供しています。ここに座っていると、心穏やかになる、というか自然に落ち着いてくる、というように、とても優しい空気が漂っています。

がんサバイバーはテーブルをなかにはさんで、たくさんの方が座っていますが、不思議なほどに静かに、リラックスしているのです。一人ひとりが自己紹介に始まり、自分の体験談を話すのですが、口を挟む人もいず、そうかといって話が無視されているのでもないのです。とても不思議な空間で、いまだ感じたことのない時の移ろいを感じるのです。

がんを告知されると、激しく動揺し、また人生の岐路に立たされているという、胸を突き刺すような衝撃にも立ち会います。自分の揺れ動く気持ちを自分自身で持ちこたえ、さまざまに襲ってくる悩みに向き合わねばなりません。温かく包み合うように、耳を傾けてくれる人のいることは、がんサバイバーには本当に大切なことと思います。

ここは教会ですから、司会・進行は牧師さんに委ねられているのですが、この雰囲気は宗教性とは別のこのように思えます。この牧師さんのように柔らかな眼差し、そして優しさに満ちた言葉、飾りがなくとも温かな、この「カフェ」のような「集い」が必要であるし、これが「セルフヘルプ」なのだと、私のなかで納得の経験でした。

がんサバイバーには、こうした当事者の集いによるコミュニケーションが必要でありますし、また同時に仕事を継続できる社会的な理解と支えが欠かせません。がんの告知を受けても、決して退職してはいけません。退職は収入の源を失うだけでなく、仕事を通じた社会との関係を失ってしまいます。社会関係を失うことは、社会的孤立を意味するのです。

がんサバイバーとして、社会的に活動をするための大きな課題の前に、いま、私たちは立たされています。がんサバイバーの意欲と願望だけではこの課題を超えることはできません。いいよ、一緒に生きていこう、こうささやいて、支えてくれるあなたが必要なのです。がんサバイバーと一緒に社会的に生きることが、この社会の人々にとって重要な約束としなければならない、と思います。

医療科学・技術はがんの克服に向けて、新しい未来を用意してくれるでしょう。ですから、がんに打ち勝つ社会には、がんサバイバーと手をつなぎ、がんサバイバーが仕事を継続できる配慮が必要と思われる。

たとえば、職種や職場の異動、さらに仕事を進めるためのフルタイムから柔軟な仕事時間の編成、あるいは在宅勤務の可能性の追求などです。

私たちのうちの誰かが、あるいは友人の誰かが、こうしている時にも、「がん」と告知を受けているのですから。

投稿をお許しいただきありがとうございます。これからもこのテーマを追って研究を続けます。どうぞ、よろしくお願いします。

「がんサバイバー」という表現は耳慣れないかと思います。「がん」と告知されて、どう生きるかを自分に問うとき、この用語が意味を持ちます。高松さんの研究は当事者でなければ語れない、その「語り」を引き出すことです。

(豊田謙二)

「九州安寿会の取り組み」

アロン化成株式会社・福岡支店 ライフサポートグループ

長谷川 智一

九州安寿会とは

安寿会とは、アロン化成(株)が製造・販売する「安寿」製品を主体とした介護関連商品の普及・販売活動を通じ、社会に対してより良い介護用品の情報・商品提供と介護市場に於ける会員相互の共存・共栄を計る事を目的として発足した会です。今では北海道・東北・関東・中部・近畿・中国四国・九州・沖縄の全国8ブロックで運営され、正会員数は 768 社になる会として活動を行っている会になり、その中でも九州安寿会は他ブロックに先駆けて最初に発足された会であります。

活動内容

ではどういった活動を行っているかといいますと、1. 総会の開催 2. 会員向け製品説明会の実施及び情報交換会の開催 3. 安寿介護用品の普及と新製品開発の研究・提案 4. 会員相互の情報交換と親睦の増進 5. 安寿介護用品利用者等に対する展示会・説明会等の応援 6. その他本会の目的達成に向け必要と認められる各種事業 を九州7県に於いて行っております。

排泄ケアに関する研修

そしてこれらの事業内容の中で 2017 年度事業に於きましては、当社の強みである排泄分野にこだわり、「排泄用具は高齢者に必要不可欠な用具である」という考え方に立ち、排泄に関する研修会に力を入れる方針とし、具体的には「排泄ケアに関する研修」をテーマとする活動に主眼を置く事と致しました。

さらに 2017 年度は「排泄ケアに関する研修」は会員様だけでなく、会員様からご紹介された介護従事者の方にも無料で参加頂ける事とし、広く排泄ケアに関して知識を深める場とする事と致しました。

排泄ケアの実態は

そこで、それらを踏まえて九州安寿会としてどういった「排泄ケアに関する研修」を行うべきか？という点について考えていきました。「安寿製品での排泄ケア用品主体で研修を行っていくべきか？しかし今では様々な排泄に関する製品が世の中に存在しており、身体含めた多様な状況のご利用者様がそれら製品を組合せてご利用頂いているのが実状であるので、できるだけ実態に合わせた、かつ提案型の研修会にするべきでないか？ではどこまでの排泄ケア用品をご提案するべきなのか？どの段階の排泄ケア用品を会員様や介護従事者の方は知りたがっているのか？」と考えており

ました。そこで実態をできる限り把握するべく、多くの方にヒアリングをした結果、「家のトイレが使えなくなる身体状況になった場合、次はおむつの使用をすぐに考える場合が多い。なぜなら家のトイレ～おむつまでの間で使える排泄ケア用品を良く知らないから」という方が多いという別の実態も見えてきたのです

つまり「家のトイレ～おむつ」までの間の排泄ケア用品を活用する事を学ぶ機会が少なく、さらに「良く知らないから使わない・提案しない」という悪循環になり、ご利用者の排泄の自立及び機能維持を諦めてしまっている実態が浮かび上がってきたのです。

そこでまずは「家のトイレ～おむつ」の間に活用できる排泄ケア用品を知り、使い方を学び、提案できる「排泄ケア研修会」を行う事が必要であると考えに至り、以前より交流させて頂いておりました NPO 福祉用具ネットの大山理事様に御相談させて頂いたのが以下の「排泄ケア研修会」の事の始まりとなります。

「排泄ケア研修会」を7県で開催

排泄ケア研修会の内容に於いてNPO福祉用具ネットの大山理事を始め、山形理事、坂田副理事長に多大なるご協力を頂きまして、講義を大山理事と山形理事にお願いする事としました。

内容は「排泄ケアのプラン、もう一度見直しませんか？」という主軸テーマを基に、大山理事に①「排泄ケアで人生が変わる！？場面に応じた排泄ケア用品の選び方と使い方のポイント」というテーマで排泄ケアの総論を講義頂き、「家のトイレ～おむつ」の間にある排泄ケア用品の紹介・活用事例を学び、その後に山形理事に②「自立を促すポータブルトイレの活用法 身体状況の見極め方と介助技術」というテーマで介助技術をポータブルトイレを使って実技形式で学ぶという2本立ての講義の研修会を行いました。この研修会は福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島県の7県にて開催し、会員様含め大変好評頂き、多くの方に御参加頂きました。

今後も九州安寿会は、多くの方々に福祉用具の有用性を伝え活用頂けるよう、会員様と一緒に研鑽の機会を作るとともに、会員様や介護従事者の方々と相互に発展していく事を念頭に活動を行って参りたいと思いますので、皆様のご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

九州安寿会主催 排泄ケア研修会のご報告

～排泄ケア、見直しませんか！～

NPO福祉用具ネット 事務局 大山 美智江（看護師）



6 月宮崎市（大山担当）



7 月大分市（山形・大山担当）



10 月鹿児島市（山形・大山担当）



11 月北九州市（NPO福祉用具ネット理事）



12 月熊本市（山形・大山担当）



1 月長崎市（山形・海尾・大山担当）



2 月佐賀県武雄市（山形・大山担当）

九州安寿会主催の排泄ケア研修会を担当させていただくことになり、介護現場の皆様と排泄ケアについての情報交換をする機会を得ました。そして、改めてポータブルトイレの役割の重要性に気付かされたのでした。

安易なおむつ使用になってしまっている現状が多くあること、それは、私達専門職が真正面から排泄のニーズを見つめていないのではないかと感じ、大いに反省しなければと感じた次第です。

さらに個々の身体状況に合わせた介助方法が不適切なために排泄の問題が解決に至らず、あきらめておむつ使用となっているのではないかと感じました。

いろいろなタイプの尿失禁に対応した排泄ケアの支援が必要であり、①設置場所、②移乗方法、③衣服の着脱のタイミング、④音や臭い対策、衝立など尊厳を十分に配慮した排泄環境の整備の支援等が大切であること。これらを適切に支援することができれば座って排泄ができる人がもっと多くいるのではないかと思います。特に排便については、座位姿勢での排便をもっと追求すべきではないと感じたのでした。腹圧を加えられる前傾姿勢で、さらに毎日習慣となるタイミングへの支援も求められるのだと思いました。

「座って、排せつを！ 特に排便だけでもポータブルトイレに座らせることに挑戦しませんか！」

事務局だより

《29年1月から3月までの事務局のうごき》

平成28年12月の続き

12月12・13日 開発相談 東京
12月14日 開発相談
12月23日 動作介助技術勉強会1回目
12月27日 開発会議 飯塚市
12月28日 開発会議 福岡市
12月29日 事例相談 田川市
12月30日 情報誌発送

平成29年1月

1月7日 出前講座 福岡市
1月13日 開発会議 飯塚市
1月15日 開発会議 飯塚市
1月18日 開発会議 北九州市
1月21日・22日 開発相談 東京
1月25日 九州安寿会主催排泄ケア研修会 in 長崎
1月26日 助成金説明会 福岡市

2月

2月1日 事例相談 開発会議
2月2日 プロジェクト会議
2月3日 九州安寿会主催排泄ケア研修 in 佐賀
2月7日 プロジェクト打合せ
2月9日 特許更新手続き
2月10日 事例相談
2月11日 動作介助技術勉強会2回目
2月14日 プロジェクト打合せ
2月18日・19日 キネステパースティックコース研修会
2月19日 事例相談
2月20日 事例相談
2月21日 福祉機器参入セミナー1日目
2月22日 福祉機器参入セミナー2日目
2月22日 プロジェクト打合せ
2月25日 事例相談
2月28日 事例相談

3月

3月1日 キネステ補修研修
3月2日・3日 開発相談 東京
3月4日 キネステパースティックコース研修会
3月6日 事業の打合せ
3月7日 事業の打合せ
3月8日 開発会議 北九州市
3月11日 開発会議 飯塚市
3月13日 事業打合せ 福岡市
3月14日 開発相談
3月15日 開発相談
3月19日 理事会
3月20日 動作介助技術勉強会3回目
ささえ59号校正・印刷・発送準備

《今後の予定4月から7月まで》

4月14日 平成29年度第1回福祉用具研究会
4月29日 理事会
5月20日 キネステ体験講座
5月27日 通常総会
5月 情報誌60号企画
5月末 法務局書類提出
6月初め NPOセンター事業報告等提出
7月1日 排せつケア研修会
7月 情報誌60号発行予定

平成29年度通常総会開催のご案内

日時 平成29年5月27日(土) 13時30分
受付開始 13時受付
会場 福岡県立大学 3号館 3109教室

審議事項

- ① 平成28年度事業報告と決算報告
- ② 監査報告
- ③ 平成29年度事業計画書案と活動予算書案について
- ④ その他

第1回福祉用具研究会のご案内

平成29年4月14日(金)
18時30分～20時30分
会場 福岡県立大学3号館1階 介護実習室
テーマ
会員の自己紹介
平成29年度の活動計画について
第1回目のテーマ
福祉機器開発と福祉用具研究会活動について

NPO福祉用具ネット正会員募集中

◆新年度会員募集

NPO福祉用具ネットの活動に賛同して下さる方の会員を募集しています。

新規入会金 個人1,000円 年会費4,000円

団体2,000円 年会費30,000円

賛助会員も募集しています。 一口3,000円より

◆会員継続のご案内

28年度の会員の皆様は平成29年度の更新手続きが必要です。年会費のみご入金くださいますようお願い致します。